
チェッカーズのクリスマスソング

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チェッカーズのクリスマスソング

【Nコード】

N2188S

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

仲間達で過ごすクリスマス。その中で見たあるカップルの幻想的な姿は。チェッカーズシリーズ第六十一弾、あのジュリアに傷心のB面でした。

第一章

チェッカーズのクリスマス

スソング

「なあ」

「何だよ」

「どうしたんだよ」

僕の言葉にだ。仲間達が応えてきた。

僕を含めて七人だ。七人で部屋に集まってそのうえで話をしていた。外は冬で寒い。雪もちらついて余計に冬らしいものになっていた。

部屋の中にはストーブがある。安物だ。それでも僕達には物凄い贅沢品だ。仲間達で金を集めてやっと買った。

それを点けてビールを飲みながら話をする。あてはチキンナゲツトにハンバーガー、それとカップヌードル、本当に安く済ませている。

それを飲み食いしながらだ。僕達は話していた。

「次の曲どうする？」

僕は仲間達に話した。

「A面の曲はできたけれどな」

「B面か」

「それか」

「ああ、それだよ」

まさにそれだと。僕は仲間達に返した。

仲間は口髭を生やしたのと色白なのが僕と同じヴォーカル、黒子のギターがリーダーでノッポがベース、細目がドラム、そして僕の弟がサックスだ。僕達のバンドはこの七人でやっている。

その七人で集まってだ。そのB面の曲について話したのだ。

「それどうしようか」

「そうだな。冬だしな」

ノッポが言ってきた。

「ここはあれだよな。クリスマスだしな」

「ああ、クリスマスか」

「そうだよな」

髭と色白がノッポの言葉に乗った。

「A面の曲もクリスマスの曲だしな」

「それじゃあやっぱりB面もクリスマスでいくか」

「そうする？」

弟も話に加わった。

「A面もB面もね」

「それでいいよね」

今度は細目だった。

「どっちもクリスマスでね」

「そうそう。それでだけれどな」

リーダーがだ。話してきた。

「A面が失恋だよな」

「ああ、確かにな」

「失恋だよな」

「それはな」

皆リーダーのその言葉に頷いた。僕達の曲は失恋の曲が多い。このA面の歌もだ。やっぱり失恋の歌だった。

「最近B面も失恋の曲多いよな」

「だよなあ」

「失恋ものばっかだよな」

「だからな」

またリーダーが言ってきた。

「ここはハッピーなものにしないか？」

「ハッピーなか」

「幸せな奴だよな」

「ああ、それだ」

まさにそうした曲だというのだ。

「そうしようか」

「よし、それじゃあな」

「そうした曲でいくか」

「なあ」

話が決まったところだ。皆で僕に言ってきた。 1

「それでだけれどな」

「歌詞、いけるか？」

「そっちは」

「ああ、わかったよ」

提供された歌詞を歌うことが多い。けれど僕は元々作詞も作曲も自分達でやりたかったしそうした曲も少しだけれど作ってきている。今度は自分達で作る曲だった。作詞はいつも僕の担当だ。

「それじゃあな」

「ハッピーな感じでな」

「それで頼むな」

「さて、どんな曲にしようかな」

僕はあらためて言った。

「それじゃあ」

「作るか」

「そうするか」

そんな話をしてだった。早速作詞と作曲にかかった。僕達はその日は飲んだ。かなり徹底的に飲んでた。その日はざこ寝だった。

そしてその次の日。僕達は二日酔いが覚めてから作詞と作曲にかかった。ところがこれがどうにもいい感じにまとまらなかった。

第二章

それで困ってだ。僕は仲間達に提案した。

「外に出ないか？」

「外か」

「外にか」

「このまま部屋の中にも煮詰まるだけだしさ」
こう言った。

「それでだからさ」

「そうか、そうだよな」

「それじゃあな」

「とりあえず外に出るか」

「そうするか」

仲間達もそのことに頷いてくれた。そうしてだった。

街に出た。街は何処もかしこもクリスマス一色だった。クリスマスソングが奏でられツリーが飾られ店は何処もクリスマス商品で一杯だ。

サンタさんがいてカップルがにこにこしている。僕達はその街に出た時は夜だった。夜になると余計にその賑やかさと灯りが目立つ。

「妬けるねえ」

「全くだな」

「彼女がいてもな」

「それでもな」

七人で口々に苦笑いして話す。彼女がいてもそれでも男ばかりだとだ。自然とそうした感情になってしまふのは仕方がなかった。そしてその中でだ。僕はそうしたものを見ながら皆に話した。

「ハッピーなものだよな」

「ああ、そうした曲にしような」

またリーダーが答えてきた。

「それは言ったよな」

「ああ」

「それでな。ヒントはあったか？」

リーダーは今度は自分から僕に問うてきた。

「それで。あるか？」

「それがなあ」

「ないか」

「ヒントは一杯転がってるんだけれどさ」

僕は首を捻りながら話した。

「それでも。どうにも」

「浮かばないか」

「ちよつとね。もうちよつと歩くかい？」

「そうだな」

「そうする？」

ノツポと色白が僕の提案に頷いてくれた。

「とにかく曲は作らないといけないしな」

「だからな」

「だからね。まあ絶対に曲は作るよ」

作詞担当としてその責任は持っていた。無責任でないつもりだ。

「待っていてくれよ」

「そうしてよね」

「作曲はこつちですから」

細目と弟も言ってきた。実は作曲はまだ決まっていない。僕達のグループでは作曲はリーダーか色白、ノツポ、弟がする。たまに細目もする。作曲は本当に持ち回りみたいな感じになっている。

「とにかく作詞はね」

「兄ちゃんしかいないし」

「わかってるさ。とにかくさ」

夜のクリスマスの街中を見回す。クリスマスソングとツリーとネ

オンの中でカップルがににことしている。その中でだった。

僕は見つけた。その一組のカップルを。

「んっ？」

「どうした？」

髭が僕の言葉に気付いて問い返した。

「あつたか？ヒント」

「ああ、あつた」

実際にそうだと答えた僕だった。見ればだ。

そのカップルは変わっていた。何故か傘をさしている。今は雨じゃない。

第三章

けれど傘をさしてだ。にこにことしていたのだ。僕はそれを見て皆に言った。

「あのカップル」

「何だありゃ」

「雨でも雪でもないのに傘さして」

「おかしいのかね」

「やばい薬やつてるのか？」

こんな言葉まで出た。とにかくおかしな二人だった。

それで気になって七人で彼等を見た。するとだ。

よく耳を澄ますとだ。こんなことを言っていた。

「星が降ってくるからね」

「だから傘をさすんだね」

「そうよ」

女の子の方から言っていた。見れば大学生の感じだった。はしや

いでそれが許される年頃だ。それで馬鹿を言っているのかと思った。

「だって。こんなに綺麗な星空じゃない」

「あつ、確かに」

男の方も彼女の言葉に頷いた。そうして上を見上げて実際に星を見る。それにつられて僕達も星空を見た。するとその星空は。

「綺麗だよな」

「ああ」

「かなりな」

思わず息を呑んだ。そこまで綺麗な星空だった。

「こんな綺麗な空なんてな」

「滅多にないよな」

「澄んでるしな」

「そうか」

「ここだ。僕はわかった。」

「こんなに綺麗だから星が降るっていうんだな、あの娘は」

「それでか」

「それで傘もさしてか」

仲間達もここで気付いた。

「最初は何だっと思ってたけれどな」

「そういうことが」

「成程な」

これで僕達はわかった。あのカップルが何で雨でもないのに傘をさしているのか。それでわかった。

わかったうえでもまた二人を見る。今度は男の子が言っていた。

「この傘だけれどさ」

「うん。どうするの？」

「あげるよ」

にこりと笑って女の子に言っていた。

「この傘。あげるよ」

「くれるの？」

「クリスマスプレゼントにさ」

それにだと。彼女に言っていた。

「あげるからさ」

「けれどクリスマスはまだ先だけれど」

「クリスマスの時にもプレゼントするよ」

傍から話を聞いていて。随分気前のいい彼氏だと思った。傘なんて値段は安い。けれどそこに心があるならかなり高いものだからだ。

「それでいいよね」

「有り難う」

彼女もにこりと笑って応えていた。

「それじゃあ今はこの傘をね」

「どうぞ」

こんな話をして二人仲良く楽しんでいた。僕達はそんな二人をず

つと見ていた。そして二人が僕達の目の前から消えた後でだ。
リーダーがだ。皆に言ってきた。

「あの二人にするか？」

「曲の主人公？」

「あの二人に？」

「ああ、それでどうだ？」

こっ僕達に言ってきた。

第四章

「さっきまで見ていて思ったんだけれどな」

「いいんじゃないか？」

「そうだね」

まずは髭と色白のヴォーカル二人が頷いた。

「あの二人ならな」

「いい感じの曲になるよ」

「俺も賛成だな」

「俺も」

「僕もかな」

続いてノツポと細目と弟が賛成した。

「クリスマスって感じでな」

「A面と一緒にいい曲になってね」

「それでいいんじゃないかな」

「どう思う？」

リーダーは最後に僕に尋ねてきた。七人目でだ。

「それで」

「そうだな。それでいいよ」

僕もそれで賛成した。あの二人を見てあれしかないと確信していた。丁度その時にだ。リーダーから僕に声をかけてきた形だった。

「あの二人でいこう」

「これで決まりだな。あのカップルだ」

「よし、じゃあ帰って曲作るか」

「そうしよう」

七人で言い合ってた。そのうえで部屋に帰った。

帰る途中にこれまで星空だったのが急に雪になった。

雪は静かに降ってきて。僕達の周りにもふわふわと舞い降りる。そうしたものを見ながら僕達はずいずい笑ってそれでまた話した。

「これこそクリスマスだよな」

「そうだよな」

「雪があつてこそだからな」

「それに」

それにだった。街の灯り、キャンドルを見てだった。

「こういうのがあるからいいんだよな」

「クリスマスってな」

「彼女いてもいなくても」

「彼氏がいてもいなくても」

それでもだった。このクリスマスの世界があればだ。

「ツリーとキャンドル、それに雪な」

「サンタさんがプレゼントしてくれるからな」

「それだけでも充分だけれどな」

「あえてな」

あえてだった。それからだった。

「相手がいればそれで幸せになれば」

「最高だよな」

あの二人を思い出しながらだった。あの二人は知らないだろうけれど僕達に音楽を提供してくれた。そのことに心から感謝していた。

チエツカーズのクリスマスソング

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2188s/>

チェッカーズのクリスマスソング

2011年4月4日21時25分発行